

研究発表 1A-3
10:00-10:30

A会場(大講義室)

17世紀の胡弓 —半球型胴の多様性と新史料—

竹内有一

昨年、日本の胡弓（こきう・鼓弓・小弓）の源流について考える共同研究「胡弓の源流と受容—東西交渉の視点を中心に—」（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター2008年度共同研究）を行った。共同研究員は、泉万里、上野暁子、神戸愉樹美、加納マリ、蒲生郷昭、久保田敏子、後藤静夫、竹内有一（研究代表者）、田中悠美子、寺内直子、皆川達夫、エンゲルベルト・ヨーリッセン。その発端は、2007年「環太平洋ガンバ大会 in Hawaii」を契機とした、加納・神戸両氏による共同作業である。共同研究で扱ったテーマは多岐にわたり（『日本伝統音楽研究センター所報』第10号に概要を掲載）、現在いくつかのテーマについて成果の公開作業を進めている。本発表はその一環として、次の2点に話題を絞り、史料の紹介と今後の課題を述べるものである。

1. 17世紀の胡弓描画にみられる「半球型」胴をさらに注視する必要性

- (A) 胡弓の胴を半球型ないし円形で描く絵画が17世紀初期から多数存在すること
- (B) その形状が沖縄のクーチョーやアジアのいくつかの弦楽器と似ていること

元禄期以前の胡弓描画を収集した結果、明らかに胡弓とわかる描画が初見されるのは17世紀初期（寛永期）であること、そして(A)について再認識することとなった。半球型胴については、野川美穂子氏（「胡弓樂」『日本の伝統芸能講座 音楽』（2008年、淡交社））や横田庄一郎氏（『胡弓の謎を追って—おわらの恋風』（2008年、朔北社））も考察されているが、共同研究（とくに、泉・加納・蒲生研究員による蓄積）において確認された新たな描画例を中心に、

その概要を紹介する。この形状については、沖縄やアジア諸国の楽器に関する歴史的な検証と先後関係の考証が必要であると認識したが、結果として先行研究を上回るような十分な検証はできなかった。沖縄のフロアからのご教示を期待する次第である。なお、日本の現在の胡弓（三味線型のもの）については、楽器学の研究者より、「楽器学的な視点で分析するなら、これと同じ形態の擦弦楽器はほかに類例がないとせざるを得ない。起源についても不詳とせざるを得ない」旨の指摘を受けている。

2. 「らべいか」言説の新史料『滑稽太平記』について

「三味線は蛇皮 胡弓はらべいかといへり」。江戸中後期からいくつかの隨筆類に紹介され、大正期の『廣文庫』にも引用された言説である。従来、俳人の神田貞宣「浅草川舟遊の記」を原拠とするとされてきた。大槻文彦が『言海』（明治22年）の「こきゅう」項に「古ク、ラベイカ。葡萄牙渡来ノ楽器」と記すなど、この言説が研究史に及ぼした影響は大きかった。しかし、この「舟遊の記」が、実は『滑稽太平記』という俳諧資料の一項目であることについては、これまでに着目された機会がなかったようである。『滑稽太平記』のこの記事の前後には、貞宣が1656年に詠んだ俳句が掲載される。仮にこの年代に着目すると、「らべいか」言説の初出とされる『糸竹初心集』出版よりも8年早い。果たして、「らべいか」の初出史料が塗り替えられることになるのかどうか？ いずれにしても、今後の研究に欠かすことのできない基礎史料の一つといえる。